

一つの曲が、 人生を変えることもある

— Shimaru Kanji

俳優・歌手

石丸幹二

ヴァン編集部
聞き手



音色に憧れた子ども時代

Vent(以下V): プロフィールを拝見すると、幼い頃からたくさんの楽器に触れていらっやいますね。

石丸: 初めて演奏した楽器は、当時はやりだしたエレクトーン(電子オルガン)なんです。電子音ではありますが、フルートなどいろいろな楽器の音が出せて、それらの音色にたいへん興味をもちました。小学校に入学して鼓笛隊でたくさんの楽器を見たときにはときめいてしまって、もう音色のとりこという感じでしたね。

V: 歌うことには興味をおもちでしたか?

石丸: 歌うことも好きでした。担任の先生が「今日はこの歌を歌うよ」

と言って、毎朝みんなで歌わせてくれたんです。先生の指導って大事ですよ。そのおかげで唱歌、童謡などがしっかりと体の中に入ってきましたから。

V: 学芸会ではいつも主役だったのだろうか、などと勝手に想像してしまうのですが…。

石丸: いえいえ、全然! 人前で何かをするのはあまり得意ではなかったからなあ…。楽器の演奏や歌うことはもちろん好きでしたが、楽譜や楽器そのものへの興味も強かったんです。月に1回ぐらい、お小遣いでポケットスコアを買ったり、楽器を見て歩いたり…。スコアにあるハ音記号を「ト音記号でもへ音記号でもないこれは何だろう?」と見て楽しんでいました。



○いしまる・かんじ
1965年 愛媛県出身。
幼少の頃から高校入学までに、ピアノ、スネアドラム、トロンボーン、サクソフォーン等に触れる。千葉県立幕張西高等学校普通科音楽コースにてチェロ、東京音楽大学音楽学部器楽科でサクソフォーン、東京藝術大学音楽学部声楽科で声楽を学ぶ。
90年、ミュージカル『オペラ座の怪人』（劇団四季）のラウル役で俳優デビューを飾る。
以降、看板俳優として17年在籍し、数々の舞台作品に主演、2007年12月に退団。09年、俳優活動を再開し、舞台、映像と幅広く俳優活動を繰り広げる一方で、10年に初のソロアルバムを発売、ソロコンサート開催。11年～13年は音楽番組「石丸幹二のシアターへようこそ」（NHK-FM）のナビゲーター、さらには「兵士の物語」でサイトウ・キネン・フェスティバルや宮崎国際音楽祭に出演するなど、多彩な音楽活動を展開する。12年、『グレンギャリー・グレン・ロス』、『GOLD ～カミーユとロダン』、『ジキル&ハイド』の舞台演技が認められて「第37回菊田一夫演劇賞」を受賞した。

—まあ、一人遊びの好きな子でした。

V: 高校でも音楽コースで学ばれていますが、その頃から将来は音楽の道に進もうと考えていらっしゃいましたか？

石丸: 生活の中に音楽があるようにしたいとは思っていましたが、プレーヤーになりたいという気持ちはありませんでした。ただ、音楽を仕事に選べたらどれだけ幸せなんだろう、音楽について何か語る人や書く人になりたいなあとは、漠然と思っていました。

シューベルトの『魔王』が転機に

V: 東京音楽大学にサクソフォーン専攻で入学したのち、在学中に東京藝術大学の声楽科を受験し直されました。そのきっかけはどのようなものだったのでしょうか？

石丸: 一つはいろいろな場で語っていますが、テレビで観たジェシー・ノーマンが歌うシューベルトの『魔王』に衝撃を受けたことです。3つのキャラクターに合わせて瞬時に変わる彼女の表情、彼女の声…。それまでクラシックの声楽というのは、いちばん遠いところにある、どちらかと言うと苦手なジャンルだったんです。楽器の出す音色がいちばんだと思っていましたから。もう一つは、東京音大時代にルネサンス時代の作品を歌っているグループから、男声が足りないので、声を貸してくれと言われてまして…。

V: 中学校や高校の合唱でも、運動部から男子が借り出されますよね。

石丸: そんな感じですが。そこで指導していた先生が「君は声を使って表現できる力をもっている」と言ってくれました。それが、ちょうどジェシー・ノーマンに出会ったときとほぼ同じ時期だったのです。「男性の声は育成期間があり、現状の声がパーフェクトではないので、今は磨く時期だと思ってトレーニングしなさい」とアドヴァイスをいただき、身近にゴールはなくても、いつか到達すればいいのだと、声楽科受験を決断するきっかけになりました。先生の言葉というのは、生徒たちにとって大切な支えになるし、そのひと言がほんとうに大きく影響するんだなと感じました。

V: 受験し直すにあたり、相当な努力をされたのでしょうかね。

石丸: 歌に関しては、3人ほどの先生のご指導を受け…がむしろに努力することもありました。運がよかったのは、受験しようと思った年、共通一次試験の改正があって、芸大は前年までの5教科7科目の試験が2教科2科目、英語と国語だけになりました。これは受けるということだろうと…楽観的なんです。

V: 『魔王』は、中学校の教科書に今も掲載されています。そしてジェシー・ノーマンの映像を生徒に観せたいという先生方の声も多く聞きます。

石丸: そうなんですか！たしかに学校で聴いた記憶があったからこそ、あのとき飛びついたと思うんです。

V: 石丸さんのお話を伺って、たくさんの方がぜひ映像を観たいと思うでしょうね。

石丸: 特に彼女のパフォーマンスだからこそ、あの曲が生きたと思います。だから僕は、ジェシー・ノーマンのようなアーティストになるのが目標です。よく野球選手がイチローみたいになりたいというのと同じですね。自己満足で歌うのではなく、聴いている人にきちんとその作品を届けるという役目を果たしている、そうした表現力をもった歌手です。とても尊敬していますし、近づきたいと思っています。

ミュージカルを知らなかった

V: 声楽を学んでいると、オペラに関心が向かうのではないかと思います。石丸さんはミュージカルの劇団四季にチャレンジされました。

石丸: オペラも大好きです。ただ、学生時代に公開講座を受けたブラジド・ドミンゴの体を見たとき—何となく分かってはいましたが、これが世界でオペラを歌える体格なんだと…。そのとき僕はもう、オペラは聴くことに徹しようと思いました。

V: そ、そんな(笑)。

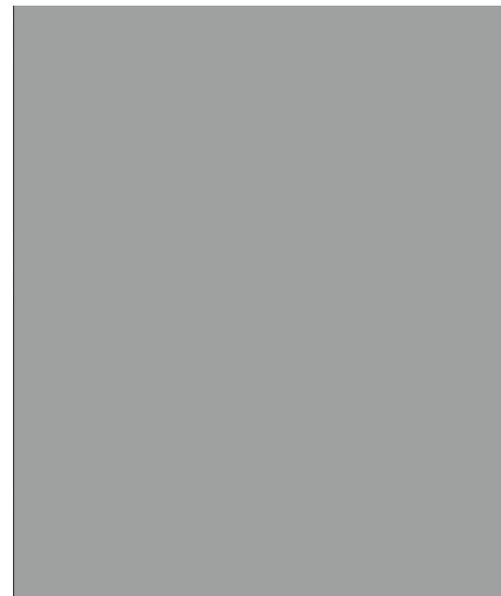
石丸: 彼と同じ舞台上で歌いたいという目標はありますが、もっと現実的に舞台上に立てるような場所を探さなくてはいけない。今もっている肉体で勝負できる場所を探そうと。しゃべっている言葉がそのまま観客に届いて、その場で解釈してもらえるような、そういうことをしたい…。そんな自分の思いを周りに話していたときに、初めてミュージカルのことを知ったんです。

V: えっ!? それは意外です。

石丸: それまで全く知らなかったジャンルだったので、自分で調べ始めました。これだ、ミュージカルなら自分のイメージするジェシー・ノーマンにつながる！『ウエスト・サイド物語』だって、バーンスタインが書いたミュージカルじゃないか！—劇団四季はその演目の上演権をもっている。「それが歌えるなら」と思って、オーディションを受けました。

V: それでみごとに合格してしまうのが、すごいところです。

石丸: 幸いなことに合格して「よしっ。念願の『ウエスト・サイド物語』だ！」と意気込んでいたら、「『オペラ座の怪人』に出るように」と言われ、その作品は知りません、とも言えず…。



劇団四季『オペラ座の怪人』2005年

撮影：荒井 健

ダンスに悪戦苦闘

V: 劇団四季にも入団され、これまで順風満帆に見えます。

石丸: ところが、全て一から勉強のし直しだったので、かなり大変でした。特にダンスには苦勞しました。

V: と言いますと？

石丸: 「明日からダンスのレッスンが始まりますので、そのつもりで」と言われ、オーディションの要項には「歌だけでいい」と書いてあったはずなのにと思ってよく見てみると、小さな文字で「ダンスもみませう」「セリフもみませう」って書いてあるじゃないですか。顔がサーッと青ざめました。案の定レッスン会場に行くと、みんな若いけれどダンスを専門にやってきている人たちばかり。そんな彼らに交じってのレッスンでした。きれいに踊る大勢の中で、自分だけがムカデのような状態でしたね。地べたをばうしかない、みたいな…。この中に交じって同じクラスで続けなさいって言われたんです。

V: それでも、「やはり向いていない」とは思わず、続けてこられたのはすごいですね。

石丸: いや、すぐやめようと思いましたよ。ほんとうにそのときは、生き地獄のようでしたから。「最初はみんなそうだった」などと言われましたけれど、そんなこと絶対に信じませんでした(笑)。でも、そこをぐり抜けてみようとも思ったのです。シャッターをさっと閉めるのではなく、できないは別として、それを乗り越えることによって、何か自分が変われるかもしれない、やってみて答えを出そうと思いました。

V: すばらしいですね。

石丸: 劇団に入ったときに戦慄を覚えたのは、「今まで君たちは平等に、同じように進み、進級してきた人たちでしょう。今日から不平等社会になります」という宣告でした。「あなたたちの出来、不出来によって評価も違うし、つく役も異なる。それに見合った人が残っていくので、隣の人と平等という考えは捨ててください」と言われました。自分をちゃんとさげ出さないといけないんだ、と覚悟しました。

V: ご自身でどのようにトレーニングや努力をされたのでしょうか？

石丸: 先輩たちのまねをしました。ただし、外見のまねはできるようになります。内面から芽生えてできているような表現は、まねることができないんですよ。自分を掘り下げていくために、本を読んだり感性を磨いたりする作業が始まりました。

V: 例えば、文学に触れるといったことですか？

石丸: そうですね。映画を観たり、本を読んだり—『ハーレクイン・ロマンス』なども読みました(笑)。その他「『ガラスの仮面』は演劇を分かりやすく書いてある漫画だよ」と教えてもらったり、「宝塚や歌舞伎も観なさい。様式美というのはこうなんだ」とも。そこからのスタートでした。観ていないものや知らない世界が多すぎたのです。

表現者としての新しい一歩

V: 石丸さんの新橋演舞場での鮮烈なデビューはとても印象的でしたが、入団されてからどれくらいの期間だったのですか？

石丸: 半年後ぐらいでした。まだ大学在学中の4年生の夏に『オペラ座の怪人』でデビューしました。大学は3か月間にわたる夏休みがあり、そこに上演期間がぴったりはまったので「じゃあ、出させてください」ということになりました。当時まだ24歳ぐらいですね。

V: さまざまなレッスンと並行しながら出演されていたのですか？

石丸: 言葉を表現する、踊りながら歌う、芝居をする…。それらの全てが新鮮でした。今でもよく覚えているのは、舞台上で表現する楽曲の世界がこのくらい(両手を大きく広げて)だとすると、大学で歌を勉強してきたのはこれくらい(手の幅を10センチぐらいにして)だったと実感したことです。

V: 当時、客席から拝見しましたが、既に輝いていらっしゃって…。あの存在感と、声の甘さ…ほんとうにラウルがそこにいるように感じました。

石丸: ありがとうございます。衣装が素晴らしかったんですよ(笑)。

V: デビュー当時はどのような思いで舞台上に立っていらっしゃいましたか？

石丸: そうですね…ただ、負けたくないとか、辞めたくないとか、という思いを自分に突き付けていましたね。ほぼ毎回の公演で誰かと競わされていましたが、その相手に限らず、それをジャッジする人に負けたくない。「俺を見てくれっ!」という感じで、毎日挑んでいた気がします。それでもペシャンコに潰されていましたが(笑)。

テレビドラマも楽しい!

V: 現在はミュージカルだけでなく、テレビドラマへの出演、またソロでの歌唱も披露するなど活躍の場を広げていらっしゃいます。テレビドラマのような、演技のみという世界は、ミュージカルとは全く違う世界なのでしょうか？

石丸: 全然違いますね。ミュージカルをやりたくて劇団四季に入りましたが、そのレパートリーにはストレート プレイもあるのです。歌はなく、せりふだけで表現するストレート プレイは、全く異業種のような感じでした。でも、ミュージカルとは違った角度で深くお客さんにメッセージを伝えることができ、そのおもしろさがだんだん分かってきたのです。そうした背景があったので、その後、よりリアルな世界であるテレビドラマに出演したときも、表現する、役者として演技するのはとても楽しいと感じることができました。

V: 今後の抱負として、ご自身が思い描いていらっしゃることはありますか？

石丸: 多様性のあるアーティストでしょうか。自分で道を閉ざさず、もっともっと新しいことに挑戦したいですね。それから、今までやってきたことを糧に、それをもっと膨らませていくことも…。3月に公演する『ジキル&ハイド』のように、再演の声がかかるような、それに耐えうるようなアーティストでいたいと思っています。肉体的にも、精神的な部分も、いつまでも磨かれている状態でありたいと思います。今の目標は、お客さんに作品の内容や世界をきちんと分かっていたいただけるような表現をする、ということです。

ミュージカルのススメ

V: 高校の教科書では、ミュージカル・ナンバーが生徒にとっても人気があり、『キャッツ』『オペラ座の怪人』『アラジン』『ライオンキング』など、いろいろな曲が掲載されています。

石丸: うれしいですね! 劇団四季の活動が貢献していますよね。実際、「日本中の子どもたちにミュージカルを」と、いろいろなところで公演を行ってきました。今やそんなふうには、ミュージカルが皆さんの中に、子どもたちの中に根付きつつあるのはほんとうにうれしいことです。最近ではインターネットなどで海外の映像が手軽に鑑賞できるので、日本のミュージカルと比較されてしまうことがあります。そういう意味でも、子どもたちの目標になるようなアーティストとして、自分自身に磨きをかけていかなければと思いますね。

V: ますますのご活躍を期待しております。お約束の時間になってしまいましたが、子どもたちにメッセージをいただけますか？

石丸: ぜひ、保護者の方に「ミュージカルが観たい」と言ってください。子どもたちだけでは観に行けませんからね。「ミュージカルって何?」と聞かれたら、それはしめたもの。まず興味をもっていただけたらうれしいです。子どもたちも、もし自分もこういう舞台上で表現したいなと思ったら、ぜひぜひ僕らのところに飛び込んでほしい。

V: では、先生方にもお願いします。

石丸: ぜひミュージカルを教材として取り上げてください! 僕も大学時代、舞台に出ながら教育実習に行き、そこで自分が実際出演していた作品の映像や、映画『ウエスト・サイド物語』を見せました。

当時は「こんな見たことなかった」という反応があって、新鮮でしたね。一緒に『キャッツ』の「メモリー」も歌いました。ミュージカルは何より興味をもちやすいですし、音楽的な魅力にあふれています。ぜひぜひ、先生方も積極的に鑑賞したり、体験したりしていただきたいと思います。



『ジキル&ハイド』2016年

撮影: 田中峻平



『グレンギャリー・グレン・ロス』2011年

写真提供: 銀河劇場



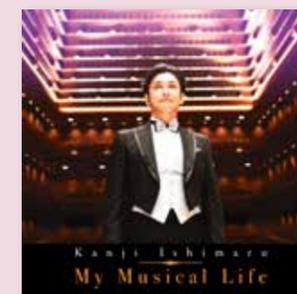
日曜劇場『ルーズヴェルト・ゲーム』2014年

写真提供: TBS

CD Information

「My Musical Life」

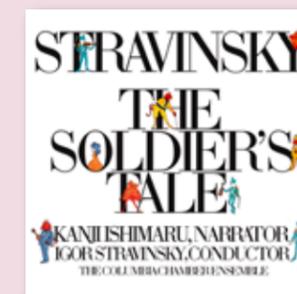
・ミュージカルの代表的なナンバーを収録した、石丸幹二さんを知るための必聴盤。デュエットのアーティストも豪華! 2015年発売。



SICL-30027 / 定価(本体2,800円+消費税)

「ストラヴィンスキー：兵士の物語」

・ストラヴィンスキー自身の指揮で録音された音源を基に、石丸幹二さんが語り手となって完成させた魅力的な一枚。2015年発売。



SICC-30219 / 定価(本体2,500円+消費税)

授業者に訊く—① 高等学校の実践

最初にご紹介する実践は、高校2年生による創作(旋律をつくる)の学習です。大阪府立夕陽丘高等学校は、今年創立110年を迎える伝統校。1995年からは音楽科も設置されていますが、今回は普通科の生徒たちの授業を参観しました。iPadの活用など、充実した学習環境の中で、生徒たちが意欲的に学習しています。

授業者: 鈴川 了 (大阪府立夕陽丘高等学校)



伝統ある夕陽丘高校

佐井: 授業を拝見して、素直でいい生徒さんたちだなと思いました。みんな笑顔で学習しているのがたいへん印象的でした。

鈴川: ありがとうございます。本校はもともと女子校だったこともあって、気品と情操が重視されているところがあり、確かに素直で真面目な生徒が多いですね。

佐井: 今日は普通科の2年生による創作ということで、とても楽しみにしていました。音楽科には、僕がレッスンしている生徒もいるんですよ。

鈴川: そうなんですか! 普通科の生徒も音楽がよくでき、「音楽がとても好き」「音楽大学に進学したい」という理由で入学してくる生徒がいます。この学校なら音楽を通して充実した学校生活を送れるだろうと目指して入学してくれるのはうれしいことです。



○すずかわ・りょう
大阪府立夕陽丘高等学校指導教諭

チーム・ティーチングの実践

佐井: 45分授業の2時間構成でしたが、学習項目が豊富で流れもとてもスムーズでした。

鈴川: 今、普通科の授業ではチーム・ティーチングを実践しており、前半と後半で担当を分けて指導案を考えています。今日の前半は山本先生による内容でした。

佐井: 「リズム ソルフェージュ」や発声と歌唱ですね。山本先生にも少しお話を伺いたいと思います。

山本: 本校のように音楽科の教員が複数配置されている学校はめったにありませんので、チーム・ティーチングを行うには絶好のチャンスです。まして作曲を専門に学ばれてきた先生が同じ学校にいるのはさらに幸運なこと、私が苦手とする創作の指導について助けていただこうと(笑)。

佐井: 「リズム ソルフェージュ」の活動では、拍にのること、オフ・ビート、いわゆる裏拍で手拍子を打つことに力点が置かれていました。どのような理由からでしょうか。

山本: 拍感を捉えてリズムが強くなれば、音楽全体の能力が向上する、ということに着目したからです。本校の生徒はある程度の力をもっているのですぐにリズムをまねることはできますが、楽譜を見るとできない…という状況があります。やはり読譜が苦手な生徒は多いよ

うです。

佐井: そうなんですね。

山本: 創作にもつながる学習なので「楽譜のルールを覚えたら一生音楽を楽しめるよ」と生徒たちに伝えながら、毎時間の導入として取り入れています。



○やまもと・のぶこ
大阪府立夕陽丘高等学校教諭(音楽科長)

歌唱活動を兼ねてアナリーゼ

佐井: 本時の中心である創作活動について振り返ってみたいと思います。授業では創作を行う前に『からたちの花』の歌唱をしたり、詩を音読して抑揚を感じ取ったりしていました。これは旋律づくりとも関連しているわけですね。

鈴川: 『からたちの花』を通して、言葉の抑揚、あるいは歌になったときの音高や音価の長短によってどのような効果が生じて、そこから人間は何を得たり感じ取ったりするのか。そこを学習することで、旋律づくりのモチベーションを上げたり手がかりを得られたりすればよい

「同じことば、違うメロディー」 ～高校2年生による創作

聞き手: 佐井孝彰 (作曲家) / 取材協力: 山本伸子 (大阪府立夕陽丘高等学校)



と思っています。

佐井: 鈴川先生も僕も関西出身ですが、歌や合唱曲をつくるときに言葉への抵抗感はありませんか? 自分ではイントネーションが即座に分からないときがあるので、いつも書いて確認してしまいます。

鈴川: 分かります。だから生徒たちには「アナウンサーのように朗読してみよう」と言います。そうしてスイッチを入れてあげると、生徒たちは抵抗なくまねできるんです。

山本: イントネーションについて心配していましたが、やはりテレビの影響が強いのか、生徒たちは、どの地方の人が聞いても聞きやすいといわれている共通語(標準語)でさっと朗読できますね。

佐井: 現代の子どもたちならではですね。すみません、『からたちの花』のアナリーゼの話の途中でした。

鈴川: 詩にメロディーが付いて音楽になったとき、なぜそこを伸ばしたのか、なぜここでテヌートを付けたのかなど「なぜだろう?」という感覚をもってほしいのです。「山田耕筰は、ここで何か感じたんだな」とか。

「ああ、そうなんだ」で終わってしまいますが、比較する対象があれば「こんなふうには違うものなんだな」と具体的なイメージをつかめるのではないかな、と。

佐井: 共感することもできますよね。理解も深まりますし。

鈴川: 生徒には何を大切に味わってほしいのかということを示していきたいのです。

佐井: やはりそこから創作につなげていきたいということですね。『からたちの花』を分析しながら歌唱の学習を経て、その次に創作に入りました。金子みすゞの『露』という詩を用いてメロディーをつくる内容ですが、ここでも先に分析をする活動があるわけですね。

鈴川: そうです。この『露』という詩には中田喜直先生が作曲されている作品があります。私の大学時代に恩師である北川文雄先生の下、この『露』で作品をつくる機会があり、同じゼミの学生のものに合わせて計4つの『露』が手元にありましたので、これらを山本先生に歌っていただき、鑑賞させました。

佐井: 山本先生は声楽がご専門なんですね。

鈴川: はい。実際に歌ってくださる声楽の先生がそばにいるのはありがたいことです。空いている授業時間に来ていただいていたのですが、

佐井: そうして作曲家の意図をくみ取り、「ああ、なるほど!」と分かったときはうれしいですね。

同じ詩による4つの歌を基にして

佐井: この学習の中で、「もし○○だったら」という切り口で分析したのは、とても興味深かったです。「もしここを長く伸ばさなかったら」「もしこの旋律が上行しなかったらどんな感じか」と比較したところ、

鈴川: たった1回だけ聴かせて「ほら、こうだったでしょう」と言っても、生徒たちは

○さい・たかあき
東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。同大学院音楽研究科作曲専攻修了。学内に安宅賞受賞。第17回現音作曲新人賞受賞。第24回日本交響楽振興財団作曲賞入選。第3回JFC作曲賞入選。これまでに、藤原嘉文、浦田健次郎、小山 薫、土田英介の各氏に師事。相愛大学音楽学部非常勤講師、日本現代音楽協会会員。代表作に、管弦楽のための『讃歌』、『Duo』～ヴァイオリンとピアノによる、『弦楽四重奏曲』、無伴奏ヴァイオリンのための『Capriccio』などの他、『メッセージ』『風をみつめて』『願い』『海の石 混声合唱とピアノのために』『eyeの中に愛 女声合唱とピアノのために』などの合唱曲がある。新しい高等学校の教科書では、『ひまわりの約束』『レット・イット・ゴー～ありのままに』なども編曲している。





先生が目の前で歌っているということで、生徒もたいへん興味をもって聴いてくれました。

佐井: 鈴川先生の作品もあることを生徒は知っていたのですか？

鈴川: 伝えました。これが予習段階のワークシート(図版参照)ですが、4つの作品の鑑賞から、まず詩に対する理解を深めさせ、実際にこの詩にメロディーを付けることを説明します。表にABCDとあるように、どの曲が誰の作品かということは伏せておいて、ワークシート①のほうは演奏を聴いて、第一印象をさっと書けるように少し間を置いて、それで次の曲に…という手順で進めました。



創作への準備

佐井: 生徒から感想はすぐ出てきますか。何か書き方のヒントを出されるのですか？

鈴川: かなり書きますよ。4曲を通して似ているところと違うところを感じ取っています。ただ感想を求めてしまうと「きれいだった」で終わってしまうので、こちらからどういった点からそう感じたのかを聞き取るようにさせています。

佐井: なるほど。それで、もう少し細かく分析した表がワークシート②なんですね。

鈴川: そうです。予習の段階で「この詩のクライマックスはどの部分だと思いますか」と問いかけ、詩を読んだときに「ここを言いたいのではないか」と自分なりの意見をもってから、実際に4人の作品を聴きます。クライマックスというと、ポピュラー音楽ではサビの部分と考えますが、こうした歌曲では、いちばん高い音が出てくる場所だったり、音価の長い音だったりします。短い詩でも、作曲者はこの部分が言いたかったのかという発見ができるとうれしいですね。

佐井: このワークシートはどのように活用されるのですか？

鈴川: グループごとに書いた内容を確認し合って、他の人がどう感じたのか、どういう意見があったのかを発表します。それを板書し、実際に和音や音階をピアノで弾いてみてニュアンスを確認するようにしています。生徒たちは「幼稚園みたいな雰囲気」とか「ジブリの感じ」というような表現をすることがあるので、こちらがそれを即座に音として提示することが少し大変ですね。

創作へのハードルを下げ、モチベーションを上げる

佐井: そうした分析は、作曲するうえでとても大事なことにつながりますよね。ところで、今日の授業ではiPadが使われるということだったので、つくる段階でタブレットを使用するのかなと思っていました。

鈴川: あらかじめペンタトニック(五音音階)で作曲したものを実際に打ち込むのが本時の作業です。

佐井: 今日の段階ではすでにメロディーができていたわけですね。音の検証はどのようにさせたのですか？ 例えばリコーダーを吹くとか



キーボードを弾くとか？

鈴川: まずペンタトニックがどういうものなのかを簡単に説明しました。それから「じゃあ黒い鍵盤だけでやってみよう」とピアノや木琴、鉄琴に分かれて体感させました。ペンタトニックなら、よほど変な音の動きをしない限り失敗がありませんから。

佐井: そうしないと、あてずっぽうの音楽になってしまいますからね。

鈴川: そのときに注意したことは『からたちの花』で抑揚の検証をしたように、音の並びを意識することです。ただ曲にするのではなく、より自分の思いを形にするというところです。

佐井: 鈴川先生も僕も作曲を学んでいますが、創作に「心・技・体」があるとしたら、いちばん「心」が大事だと思います。やっぱり「つくろう!」というエネルギーが必要ですね。鈴川先生の実践を拝見して、そこを大事にされているな、と強く感じました。

鈴川: 生徒たちは、創作…作曲…というものに興味はあるんです。でもいざつくるとなるとどうしていいのか分からない。だから詩に曲を付けることへのハードルは、できるだけ下げ取り組ませたいと思っています。

年間指導計画の中での位置付け

《前期》4～9月

歌唱(独唱、二重唱、合唱)／器楽／リズム ソルフエージュ

《後期》10～2月

歌唱(独唱、合唱コンクールに向けて)／器楽／リズム ソルフエージュ／◎創作／鑑賞

本時の授業の流れ

	項目	内容
導入	前回までの内容の確認	鑑賞を終え、創作の準備をする。
展開	リズム ソルフエージュ 発声 歌唱『からたちの花』 創作	ビートのオン・オフを体得する。 分析しながら歌唱をする。 金子みすゞの『露』を用いてメロディーを創作する。



恩知理加先生
大阪府立夕陽丘高等学校校長





が授業を受け持つこともありますので。私が担当するときは、「弾きたい曲を選んでいいよ」と言いますが、それにはよい面と悪い面があります。よい面は、自分の弾きたい曲を演奏できるということ。悪い面としては、弾きたい曲を選んでも難しく弾けずに挫折してしまうパターン。ですから、なるべく2～3曲候補を挙げて、その中から選ばせるようにしています。

佐井: 先生が提示する候補曲というのは、ポップスのようなものですか？

鎌田: そうですね。人気なのはゆず、西野カナ、GReeeeN、SMAPとか。『島唄』は2年生の修学旅行で沖縄へ行く生徒も多いので、後期にはいつも課題にします。

佐井: 2ページぐらいの楽譜だと、どれぐらいの期間で弾けるようになりますか？

鎌田: 生徒たちはその気になりやすくて…10月から始めて修学旅行へ行く前にはテストをするので、8時間ぐらいでしょうか。全曲弾けな

い場合の最低ラインは練習番号[A]までです。

佐井: 1回耳に入ってくれば、どんどん音楽に気持ちが向いていくのかもしれないですね。今日も弾ける生徒の演奏を聴いて「あっ、これ知っている！」って…。あまり楽譜を読めない生徒でも、自分からどんどん弾こうと取り組んでいました。



鎌田: 今年1年生の後期に、教科書にある『イエスタデイ』のキーボードアンサンブルを扱ってみました。各パート、自分のテンポでは弾けるようになりましたが、合わせることに慣れていないとメロディーラインを感じながら裏拍で入るのがすごく難しく、結局、崩壊しかけました(笑)。

動機付けを大切に

佐井: #とらを読むのも大変そうな生徒がいましたね。

鎌田: 高校生に「これはシャープですよ、これはフラットですよ」という指導だけではどうなのかと思います。でもこの生徒たちの生活の一部に少しでも音楽が入ってくるといいなということを大事にして、楽しく授業をするようにしています。ですから、ゆとりをもたせる部分と最低限指導しなければいけない部分の線引きをしています。

佐井: 到達点をきっちり設定しているのですかね。

鎌田: 例えば課題が簡単で時間を持って余す生徒にはプラスアルファの課題を出して、



その分を成績にプラスすることもありますし、グループごとのテストで誰かが休んでいて、助っ人に入れば、よくできたほうで成績をつけるよ、とか。あとは合格スタンプですね(笑)。まあ子どもっぽいのですが…。

佐井: かわいいですね。高校生になると、小・中学生のように先生の手で授業を進めていくというよりも、生徒たちの自発的な力や思いを引き出さないと、授業を進めていけないと感じました。

鎌田: 今日ご覧いただいたのは、私が担任をしているクラスなので、勉強も試験1週間前からしかしない…そういう生徒たちだということは分かっています。そんな生徒に、ふだんの勉強もそうですが、いかにしてきっかけをつくるか、動機付けをするのかということが大事だと思います。全部、手取り足取りでは教えられませんね。

佐井: 高校生の段階で音楽を身近に感じる事ができるかどうか、その後の人生に大きく関わってくることなので、先生がしっかりと種をまいていращやるのはすばらしいことだと感じました。

鎌田: そうなのかな?(笑)

佐井: ピアノや音楽が好きな生徒が増えてくれるといいですね。ピアノを愛する者の一人として、そう思いました。

鎌田: 底辺を広げるためにも、がんばっていきます！

年間指導計画の中での位置付け

《前期》4～9月

歌唱(校歌、世界の歌、日本の歌)／器楽(ピアノの基礎学習)／鑑賞(ミュージカル、CD)／楽典／音楽史

《後期》10～3月

歌唱(独唱)／器楽(リズム アンサンブル、ハンドベル、◎ピアノ)／鑑賞(CD)／楽典／音楽史

授業の流れ

	項目	内容
導入	本時の予定説明	バイエルの練習及びテストの説明。
展開	前時までの内容の復習と確認 個人練習	読譜上の注意点についての確認。 バイエル18～20番の個人練習。巡回指導。
	テスト	前方にあるグランドピアノで1人ずつテストする。
	『イエスタデイ』のパート①の練習	テストが終わった人から練習する。



佐藤富夫先生
学校法人三島学園
東北生活文化大学高等学校校長

授業者に訊く～番外編

生涯学習の現場レポート

仙台訪問時に「東北うたの本」を継承する方々にお話を伺うことができました。

ふるさとの歌 「東北うたの本」の活動

1946年2月、戦後間もない仙台から「東北うたの本」というラジオ番組の放送が始まりました。この番組は、戦時中は軍歌や国威発揚を促す歌を歌っていた子どもたちに、戦後のこれからの時代に歌える曲を提供したいという理念で制作されました。以降、1964年3月の放送終了まで約18年間、毎週土曜日の夕方に合唱団とオーケストラ伴奏による子ども向けの童謡唱歌が放送されました。ラジオが大切な娯楽であった時代、子どもたちは家族とともにラジオから流れてくる曲を聴き、楽しんだといえます。「東北うたの本」はNHK仙台中央放送局(現・NHK仙台放送局)から東北6県に向けて放送され、この地域にお住まいの70～80代の方には、これらの曲を懐かしく思い出される方も多いそうです。今回、「『東北うたの本』を歌う会」の小泉氏と千田氏にお話を伺いました。



○小泉恵一氏(「東北うたの本」を歌う会事務局長)

や、スズキヘキ、富田博、刈田仁、小名木滋(永野為武)、児童文学者の濱田廣介、巽聖歌ら。作曲家の佐藤長助、福井文彦、海鋒義美、草川信、弘田龍太郎らも作品を寄せています。

優れた作詞・作曲家に恵まれたうえ、地域に密着し長く放送された「東北うたの本」ではありましたが、時代の変化によりだんだん歌が忘れ去られるという問題に直面します。そんな中、「東北うたの本」の作品を歌い継いでいこうという運動が起こりました。NHK仙台中央放送局が発行した5冊の『とうほくうたのほん』に収録された55曲¹を再編集し、歌詞の仮名遣いを現代風に改めた『東北うたの本』が2015年に発行されました。この『東北うたの本』は、宮城県下の小学校、中学校、高等学校、支援学校、



○千田彰武氏(「東北うたの本」を歌う会実行委員)

大学、市町村の図書館をはじめ、岩手県と福島県の沿岸部の被災地に寄贈されました。さらに運動は楽譜制作だけにとどまらず、小学生・中学生・高校生・大学生、一般の合唱団が参加する「東北うたの本」全55曲の演奏会に至ります。

また2016年はラジオ番組放送開始70周年にあたり同時に、東日本大震災から5年の節目でもあります。被災地を激励しようと、仙台の他に気仙沼や石巻でも演奏会が行われ、地元の人との交流を深める活動も広がっています。気仙沼と石巻での演奏会のメインタイトルは「復興支援コンサート 東北うたの本・こころの歌」。ここでは『しあわせ運べるように』や『あすという日が』も歌われました。



作品内容に目を向けると、元気で明るい曲調、仙台の自然²や文化を歌った作品が多いことが分かります。お二人から挙げられた思い出深い曲をご紹介します。

題名	作詞	作曲
みんな元気な私たち	宮澤孝子	福井文彦
餅花	小名木 滋(永野為武)	海鋒義美
おくれ雁	刈田 仁	海鋒義美
ワンガマワシ	スズキヘキ	佐藤長助
仲よしの歌	澤渡吉彦	海鋒義美
どんど祭り	富田 博	福井文彦
ムラノコ	濱田廣介	佐藤長助
春のあしおと	富田 博	海鋒義美
たなばたまつり	小名木 滋(永野為武)	弘田龍太郎
はたおり虫	春日こうじ	海鋒義美
筆の花	額賀誠志	草川 信
ほたる	小林直明	海鋒義美
りんりん鈴虫	青木新八	海鋒義美



『東北うたの本』楽譜表紙

つくし、おくれ雁、ほたる、餅花、べにがらとんぼ、さいころ、羽根つき、コマなどが描かれている。各楽譜にはQRコードが付いており、音源を聴くことができる。

歌詞は現代に通じるものも多く、決して往時に限定する内容ではありません。例えば『餅花』。これはミズキの木に紅白や黄、緑などの色を付けた餅や札を付ける小正月の飾りで、現在でも家庭や幼稚園に行事として残っているところもあります。また『どんど祭り』は正月の松飾りを焚く火祭り、今の子どもたちも楽しみに待つお祭りの一つです。千田氏は、『東北うたの本』発行の最大の目的は歌い継ぐことだとおっしゃいます。「今の子どもたちが楽しんでいる歌がだめというのではなく、歌い継がれるものの中にはずっと変わらないものがあるということです。自然や仲間との関わり、地域の行事での大人との触れ合い、そういった生活と密着したところから、感動する心や人との違いを認め合う心は育ちます。今も昔もこれからも、変わらない大切なものであり、それらを残すのは大人の責任。「東北うたの本」にはその全てが入っています」。

1 ただラジオで流れた曲の総数はもっと多く、散逸してしまったもの数多いといわれる。
2 GHQの検閲対策で、季節の情景などを歌った曲は検閲を通りやすかったという事情もあった。

特集 編集者がGUIDEする

新しい高等学校 芸術科 音楽I の教科書



平成29年度に高等学校 芸術科 音楽Iの教科書が改訂されます。今回ヴァンでは「内容がどのように新しくなるのか」をテーマに、担当編集者の生の声を反映させながら、特集として紹介することにしました。新しい『高校生音楽1』と『MOUSA1』が、いかに進取の気性に富んでいるのか、ご高覧いただければ幸いです。

イラストレーション：ソリマチアキラ

2種類の新しい教科書を、4つのポイントから紹介します。

- ❁ ここが特長！それぞれの教科書
- ❁ 特色ある内容
- ❁ 楽器の演奏技能習得をこのようにサポートします
- ❁ やはり気になる、歌(歌唱)の内容



オーソドックスな楽曲を選び、それぞれの曲に明確な学習目標を提示。『高校生音楽1』は、中学校での学習をベースに、より深い学びにつなげます。また「聴くことを大切にする」学習を重視し、鑑賞活動を充実させています。



ちょっと
こぼれ話

教育芸術社では、高等学校の音楽教科書を各学年2種類(音楽IIIを除く)発行しています。いつ頃から2種類発行するようになったのか、この特集を機に調べてみたところ、昭和30年代の後半に『高校音楽』と『高校生



MOUSAは、創刊以来「卒業したあとも、手元に残しておきたいと思える教科書」をコンセプトに編集し続けてきました。新しい『MOUSA1』にも、生涯にわたって音楽を愛好する心を育みたい、という思いが受け継がれています！



のための音楽』というタイトルで発行したのが最初でした。歌唱教材の形態や分類の仕方に特色をもたせるなど、当時からそれぞれの教科書が趣向を凝らして編集されていたことが再確認できました。

高校生の音楽①

「中学校4年生」という意識で、着実なステップアップとして学んでほしい選曲や内容を心がけました。曲の背景や音楽史などの資料も満載しています。

あらゆる音楽活動の基盤となる鑑賞教育の充実は、当社創業者、市川都志春から受け継いだ理念です。



目次 p.6・7

MOUSA①

「アクティブ・ラーニング」や「教科横断的学習」といった課題を踏まえ、先駆的な紙面を企画しました。

どの作品にも、いろいろな解釈や表現方法があります。全ての「音楽I」の教科書に載っている『Caro mio ben』の奥の深さを、生徒と先生の会話をヒントに学習することができます。



「Caro mio ben大解剖！」 p.20・21

言語活動を、「自分の考えを書いて発表する」ことにとどめず、主体的な学びへとつなげます。



『交響曲第9番』 p.48~51

評価の高かった内容を大切に改訂しました。特に2年生で好評だった『交響曲第9番』は、より多くの高校生に学んでほしいと思い、1年生で取り上げることにしました。



『はげ山の一夜』 p.56・57

実際の演奏写真を新規に撮影！とにかく鑑賞資料を視覚的にも充実させています。



『おお、運命の女神よ』 p.58

1人の作曲家に焦点を当てた新企画。さまざまなジャンルの作品に触れることができるのは、モーツァルトならではです。映画『アマデウス』を扱う先生方が多いことも考慮しました。



「クローズ・アップ・マエストロ」 p.139~141

時代の流れの中で生まれる変化を学ぶことができます。

高校生の音楽①

バロック・ダンスに挑戦!



「メヌエットとガヴァットを聴いて踊ってみよう」p.46・47

他の教科書には見られないアプローチです。「音楽と踊り」の関連について、バロック時代まで遡って生徒たちと体験してみてください!



MOUSA①

ジャズに挑戦!



「枯葉」p.90・91

ビル・エヴァンス・トリオによる演奏を基にしたスコア譜を掲載しました。生徒の興味・関心や意欲を刺激し、幅広い音楽活動を実現することができます。演奏が難しい場合は、ピアノパートを2人で弾くなど、難易度を下げて演奏することも可能です。



我が国の 伝統音楽を俯瞰

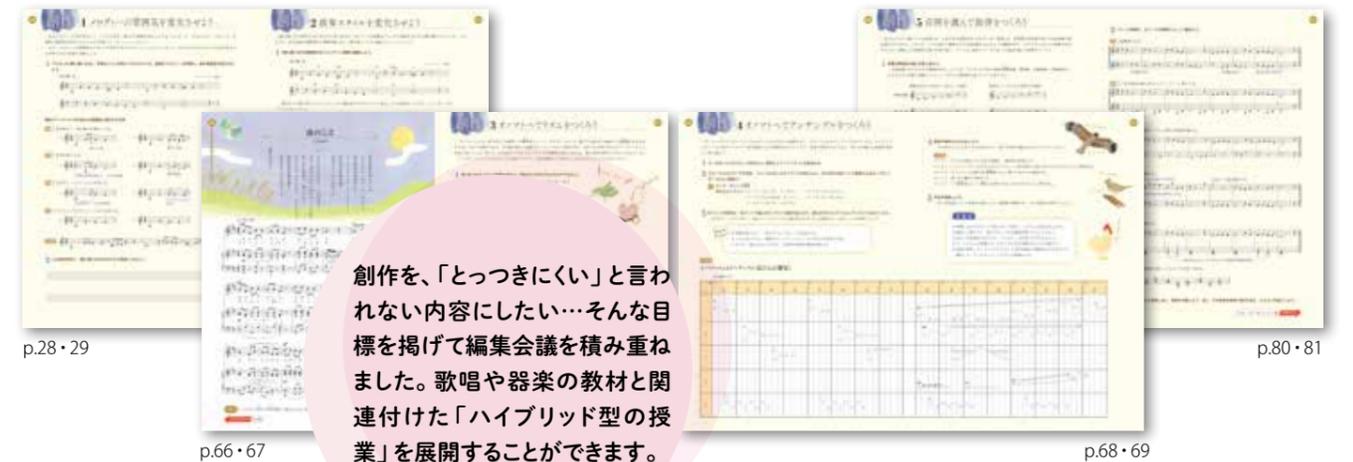


「伝統音楽の流れ」p.76・77

我が国の伝統音楽の展開が一目瞭然な鑑賞資料。歴史的な流れをジャンルごとにまとめた、学習が深まるページです。



創作活動の充実／5種類の創作を掲載



p.28・29

p.66・67

p.68・69

p.80・81

創作を、「とっつきにくい」と言われたい内容にしたい…そんな目標を掲げて編集会議を積み重ねました。歌唱や器楽の教材と関連付けた「ハイブリッド型の授業」を展開することができます。

言葉(言語)の特徴を生かした歌唱表現のために

編集の過程で特にやりがいを感じた内容です。一人一人の豊かな歌唱表現を願って紙面にしました。日本語は高低、ドイツ語は強弱と言葉のアクセントを分かりやすく示しました。



「言葉と音楽」p.16・17

「2つの『野ばら』」p.18・19



ソルフェージュ 教材の充実

「楽譜を読めるようになりたい」と思っている生徒はたくさんいます。リズムとメロディーの課題をバランスよく取り上げました。



「ソルフェージュ」p.12・13

高校生の音楽①

和楽器は箏のみを取り上げ
丁寧に学習できるように内容を精選



「箏曲『六段の調』から」p.36・37

まずは箏に触れ、「唱歌」から体験することに主眼を置いて内容をまとめました。



ギターの弾き語りをマスターする



『Happy Birthday to You』 p.32・33

短い時間でもギターの弾き語りに取り組めるよう考慮して編集しました。



楽器を用いずに演奏できる
リズムアンサンブル



声や楽器の音でなく、手拍子で音楽に参加できる試みです。リズムトレーニングとしても活用することができます。



『Clapping Quartet No.1』 p.34・35

MOUSA①

和楽器は5種類(太鼓、篠笛、三線、三味線、箏)を掲載



「和楽器」p.70～79

学校の実態に応じて選べるようになっています。練習曲は「達成感の得られる教材」を精選しました。



ステップ方式で誰でもギター奏者に



「Let's play the GUITAR」p.40～47

サビの部分弾けるようになるだけでも、生徒の達成感が得られるように選曲しました。

リコーダーの運指表は見開きで



「リコーダーの運指表」p.34・35

運指を確認しながら取り組むことができるだけでなく、鑑賞教材ともリンクさせています。



高校生の音楽①

アーティストからのメッセージ



『ひまわりの約束』p.8・9

作者である秦 基博さんご本人から生徒に向けてメッセージをいただきました。歌唱教材は高校現場での「定番」の曲を中心に掲載しています。



ポピュラー音楽の鑑賞では…

「サウンド」と「ヴォーカル」をテーマに特徴的なジャンルや演奏者を紹介。「初音ミク」も取り上げました。



『RPG』『Six Greetings』p.93



高校生による「第九」を紹介！



『響け、私たちの喜びよ!』p.40・41

高校生がベートーヴェンの『交響曲第9番』に取り組む姿を見開きで掲載。同じ仲間である高校生の姿に共感してほしいという思いを込めて紹介しました。



ここにも注目!
~編集者のこだわり

西洋音楽史を分かりやすく!



『西洋音楽史』p.60~69

西洋音楽史について、分かりやすい時代区分に沿って解説しています。全10ページに及ぶ丁寧な内容で、生涯にわたって手元に置いてほしい資料です。



MOUSA①

新しい曲が加わりました!



『ふるさと』p.6
『レット・イット・ゴー〜ありのままで』p.8・9
『小さな空』p.82・83
『デイ・ドリーム・ビリーバー』p.47

「嵐」が歌う『ふるさと』の歌詞はいくつものヴァージョンがあり、編集当時はCDも発売されていなかったのに掲載の許諾をいただくのに時間がかかりました。『レット・イット・ゴー〜ありのままで』のスケールの大きさを、ぜひ楽譜で実感してください!



オペラ『カルメン』から2曲と『Caro mio ben』では新訳を掲載



『ハバネラ』『闘牛士の歌』p.54・55

声楽家で詩集も出版されている宮本益光さんが、日本語詞を書き下ろしてくださいました。



ここにも注目!
~編集者のこだわり

イラストレーションで見る「ROCK」の歴史



『ROCK』p.94・95

ロックのジャンルのつながりが分かるよう、デザインを工夫しました。特徴をよく捉えたアーティストのイラストは、写真に勝るとも劣らない力作です!



音楽を 「ことば」にする 吉田純子

【第2回】音楽とメディアのかかわりとは？

聞き手：市川かおり（株式会社教育芸術社 代表取締役社長）

朝日新聞社編集委員の吉田純子さんにお話を伺う第2回目。今回は、音楽とは私たちの社会の中でどのような存在なのか、という点について、熱く且つ鋭く語っていただきました。



イラストレーション：ソリマチアキラ

音楽は社会と一体となって歩んでいる

市川：夕刊での連載、「音を継ぐ」を興味深く拝読しています。特に伊福部 昭さんや三善 晃さんの記事には感銘を受けました。このような連載では、曲を聴いて調べものをしたり、さまざまな取材をされたりすると思いますが、いわゆるその料理の仕方はどのようになさっていますか。

吉田：同じ素材に向き合う場合でも、料理人によって、調理の仕方にその人の経験や蓄積が出ます。今「料理の仕方」とおっしゃいましたが、まさに料理と同じです。この素材を生かすにはどうすればいいのか、そのまま出すのか、塩だけ振るのか、焼くのか。—どれがいいとは一概に言えなくて、それを食べる場所といった環境にもよるし、食べる人の年齢など、全部かかわってくるものなんです。おそらくそういったことを判断するのがセンスであり、経験だと思います。文章がうまいかどうかの世界では決してないような気がします。

市川：この連載を始めるにあたってのきっかけは何だったのでしょうか？

吉田：2015年、戦後70年という節目を迎えました。その70年の間にどんな方が活躍したかという記事は簡単にできるのだけれど、そうではなくて、日本が復興して今の状態が出来上がった70年という年月は、日本において音楽文化の土壌ができた70年でもあると考えたのです。音楽は編み目のように、社会と絡まって成熟してきたはずだという視点を持ちました。そこにはメディアの問題もあります。例えば、戦後10年も経たずに映画『ゴジラ』は公開されました。水爆から生まれた『ゴジラ』を特撮映画として制作するまで、終戦から10年経っていないのです。ほんとうに奇跡のような作品で、当時の社会の風潮、安保闘争前夜の雰囲気などを映しています。もちろん映画音楽史にも輝きを残しました。当時の映画音楽は、実際にスタジオで上映して、それに合わせてオーケストラが演奏し、録音していたんですね。今は映像と音楽は別々に作りますが、当時は一緒に制作していた。だから「映像とスコアの尺が合わないから、ここをカットしよう」なんてことになると、アシスタントがパーツと楽譜を書き直していました。団員はその間暇だから、ポーカーなどをして待つ。当然泊まり込みになりま

す。そういう時代の中にオーケストラや作曲家もいたんです。映画というメディアにみんなが夢を託していた。ひるがえって今は、現代音楽の作曲家がドラマの音楽を書くことはあまりないように思います。

市川：確かにそうですね。

吉田：いまは、映画やドラマの音楽を専門とする優れた職業作曲家の方々がいらっしゃるわけですが、武満 徹さんや黛 敏郎さんがやってきたように、実験的な響きや最先端の手法を映画やドラマの音楽のなかに採り入れるという挑戦はあまりないですよ。もっと現代音楽の人にメディアでの挑戦の場を与えてほしいし、そうした場があればもっと一般の多くの人たちにも届くはず。『現代音楽』という村の中での挑戦もいのですが、その中だけで語り合っているのではなく、同時代を生きる人にもっと音楽を伝えてほしいですね。そう考えるとき、戦後まだまもない頃の映画やドラマは今振り返っても、やっぱりすごかったなと思うんです。漫画や雑誌といったメディアにもダイナミズムがありました。自分が新聞人であることへの反省もありますが、もっと音楽と社会が一体となったものとして生きて、つくってきた人の足跡をたどることで、今の我々を見てくださいかという趣旨が「音を継ぐ」にはあるんです。

*

市川：吉田さんの音楽や文化に対する姿勢に触れてみたいへん気になっているのですが、お子さんの頃、どのように音楽と接していたのですか？

吉田：地元の和歌山で音楽教室に通ってました。松田聖子さんやピンク・レディーの時代です。聖子さんの曲は、和声的にもクラシカルなところがあって惹かれるものがありました。あと、NHK-FMをよく聴いていましたね。中学生のときは、音楽の先生がいきなりマーラーの交響曲のカセットを「聴きなさい」と持ってきてくださったこともありました。いろいろな出会いが少しずつあって、その集積で私は音楽を好きになったのだと思います。ラジオからチャイコフスキーが流れてきて、何か分からないけれどいいとか、そういう「なんかいい」出会いをく

れたのがメディアでしたし、私はクラシックがなければ自分は生きていなかったと思うぐらい、音楽には感謝しています。このように、音楽に救われる人間がいるかもしれないんですよ。ポップスもいいけれど、ポップスは今の時代のものだから、時代の流れについていけずに引きこもってる子にとっては苦痛なこともきつとあると思うんですね。

市川：なるほど。

吉田：AKB48もいいけれど、昔から続いている人間の本来の部分に触れたとき、人は救われるんですよ。今の社会の中にあるものとは共有できなくても、別のところにあるものと精神でつながっていると思えた瞬間に、救われると思うんです。

市川：子どもたちが、幸せて何だろうと考えていくうえで、一緒に歌うことの安心感や信頼、それを探求したいという感覚が支えになるんだと思います。それは本を見て覚えるとか、教え込まれてどうこうするというのではなくて、同じ世代の子どもたちどうしがつながって、彼らがつくっていく連帯感



○よしだ・じゅんこ

1971年、和歌山市生まれ。1993年、東京芸術大学音楽学部楽理科卒業、1996年、同大学院音楽研究科(西洋音楽史)修了。1997年、朝日新聞社入社。仙台支局(警察、市政担当)、東京本社芸芸部(家庭面)、整理部(地方版)、文化部(音楽担当)、広告局広告第4部(金融担当)を経て、編集委員(音楽担当)。



〇いちかわ・かおり

だったり時代だったりすると思います。

吉田:今の教科書には新しい曲が入っていますよね？現場の先生にとっては教えやすいし、要望もあるので、そうやってきているんだと思います。でも新聞と同じで、何を伝えたいかということが存在しないと、それはそれでしんどいのではないのでしょうか。新しい世界を取り入れることを否定しているわけではないのですが、なぜ教科書があるかと言えば、たとえ場所が離れていても、みんなこの曲を知ることができるか、教養として山田耕筰や滝廉太郎を知ることができる…そうしたことがとても大切だからだと思うのです。しかもこれは教養といっても楽しい歌の世界です。東日本大震災のとき、大人も子どもも“うさぎ追いかの山”が歌えました。あの曲だけはどこへ行っても共有できる力強さがあったわけです。みんなにどこか共通するような、心のふるさとにできる音楽を伝えていく、そういう曲を教科書に入れていくのと、単にはやっていて歌える曲を入れるというのではちょっと違うかなと思います。新聞のようなメディアすら、クラシックよりも商業的にマーケットの大きいポップスの記事が歓迎される傾向にあります。それと同じです。そちらの方がビジネスになるからなんです。ビジネスというものへの意識はある程度もつべきだとは思いますが、だからこそ矜持をもってふんばらないといけないところがありますよね。

市川:1冊の教科書という限られた紙面の中にどうい音楽を載せていくのかと考えると、責任を強く感じます。音として子どもの記憶に残っていくところ立ち返ると、歌い継がれてきたもの、日本人として大事なもの、今の空気の入ったもの…今生きていくのに必要なものがバランスよく見えるはずですよ。

吉田:理屈になる前に感じるものですね。例えばそれは音楽とは限らず、美術かもしれません。音楽はものすごく直接的に感性に入ってくるものなので、何か1つ見つけるだけで、その子は生きていけるかもしれない。子どもがもっている社会は狭いけれど、その分精神はどこまでも自由ですので、どこへでもつながっていけるはずなんです。それをつなげてあげさえすれば、小学校や中学校に行きづらくなったとしても、その子は自分で生きて行く道を見つけられると思う。芸術にはそういう役割があると私は考えるので、その出会いの場としてメディアが必要だと思うのです。



吉田さんが吹奏楽コンクールについて執筆した紙面。児童生徒の音楽活動にも温かいまなざしを向けている。(2015年11月2日朝日新聞朝刊より)

文化の現場にいる者の責任

市川:音楽を知る、新しい世界に触れていくきっかけとして、メディアは重要な役割もっています。
吉田:NHKが一度クラシック番組の中継を削減すると言ったことがあります。「ららら♪クラシック」という啓蒙的な番組が新たに始まりましたが、啓蒙とい

うことはそれをつくる人間の作意が働く…それもいいのですが、中継は日本の文化です。特にNHKの中継にはカラヤンがいちばん感動して、カラヤンが「映像」という文化を重視するようになったのは、NHKのカメラ割りが優秀だったことによるんです。ここでオーケストラのこの人を映す、こう映す、という、それをライブで撮るのは日本人なんです。目立たないかもしれないけれど脈々と続いてきているものをなくすというのは文化の荒廃ですし、メディアの荒廃でもあると思ったので、違うんじゃないのと言いました。その後、中継の番組が戻りましたから、声を上げていくにこしたことはないと思っています。

市川:そんなこともあったんですね。
吉田:音楽は、戦争や災害を乗り越えて生きてきています。体はなくなっても精神は生きていくことの証明のような存在です。だから、その音楽を信じるということは人間が生きていく力になると思っています。例えば、ピアノ製造のスタインウェイ社が最高金賞を獲った1867年のパリ万博は、いわば産業技術の博覧会でした。鉄や木のことをどれだけ知り尽くしているかということは、その国の軍事技術の開陳でもあったのです。ここで我々が学ばなければいけないのは、鉄や木といったピアノの素材は戦闘機と同じだということです。人をあやめる戦闘機と、人の心に協和をもたらすピアノは、同じ素材のものからできている。人を憎みあやめるものにもなり、人を癒し愛する楽器にもなるんです。原点は同じものであると考えたときに、戦闘機ではなくてピアノをつくりませんかと言いたくないですか。憎んだり嫉妬したりすることは避けられませんが、それをさらに超える感情をつくるのが、音楽教育だと思いますよ。

*

市川:音楽をどう伝えるのか、どういう言葉で伝えるのか。特に今、小さい子どもたちにも、ただ聴かせるだけではなく「こんなふう思った」ということをいろいろ表現させる言語活動がたいへん盛んになっていますが、それはなかなか難しいことです。でもそういった営みの中で、子どもたちが聴いて何か言葉



で表現するということに、音楽が作用している、それを通じて人を育てようという課題があります。
吉田:悲しい例になりますが、中学1年生の男の子が河川敷で乱暴されて亡くなった事件がありました。男の子は島根から川崎にやってきてわずか1年足らずでしたが、卒業文集の「6年間で楽しかったこと」というところに「ミューザ川崎でオーケストラを聴いたこと」と書いてあったんです。大自然の中からやってきて、おそらくオーケストラは初めて体験でびっくりしたのでしょう。残念なことにこの子は亡くなってしまいましたが、将来ファンになったかもしれない。その子にとって、1回の体験が次の大きな出会いのきっかけになるかもしれない。これを読んだときにはとても悲しくなって、すぐミューザ川崎に連絡しました。我々みんながこの子を救えなかった社会の一員としての意識をもたないと、子どもをこれからも守ってゆけないと思うんです。いじめっ子たちも、そういう出会いがあれば、人の痛みを知ってあんなことをしなかったかもしれない。人をいじめて泣かせるよりも、響き合うことのほうが幸福であると気付いたかもしれない。人と調和することによる共感が強まれば、いじめはなくなる。いかに人間性をつくっていくかが大切だと思いますから、いじめっ子をつくってしまった我々大人の責任や、助けてあげられなかった責任はみんなが背負わなければいけないものです。特に文化の現場にいる人たちは無意識であってはいけないと思います。

(平成27年10月27日 朝日新聞本社にて)